

鎮魂追悼・片山 克氏・一周忌

8月8日は片山 克さんの一周忌です。享年88歳でした。

片山さんといえばご夫妻で坂村真民さんの活躍を支えられた人として有名な方です。

強い倫理観と正義感に溢れ激闘の生涯を誠実に真実を追求して真摯に生きられました。

昨年葬儀は11日、私の80歳の誕生日でした。



忠誠を通した渾身の一筆

2021/07/26日の枕元に常備されていたメモ帳に記された一筆です。

逝去される13日前、5度目の入院で「治療方針が間もなく決まるので、もう一度退院したい」と私と電話で約束をしてくれた頃、肉体的にも精神的にも一番辛かった時に、枕元の鉛筆をとり、渾身の力を込めて書かれた一筆です。

お孫さんがアクリル板に写して「おじいちゃんが毎年送ってくれた朴の花の写真」と合成して作成された作品です。

三日前の絶筆には漢字を書く力がなかった。ひらがな文字でやっと絢子夫人判読できる次の文字は次の通りでした。

しんじんなるいのり=じっせんてつがく

もりしんぞうせんせい（ごみひろい）

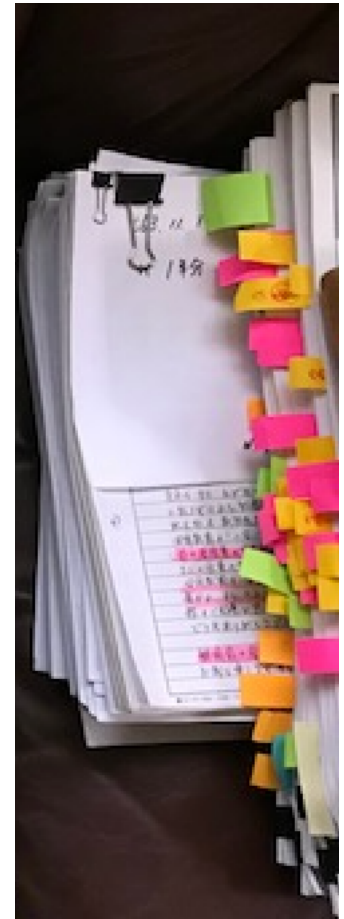
かぎやまさん（おそうじ ベんじょ）

追悼

「詩国第500号」記念「第8回全国朴の会」の以前から片山 克さんについての事実無根の風評が拡散していました。余りにも熱心な人々の話についに真民さんも、その噂に負けて「詩国」の発刊を打ち切られました。知らぬは仏ばかりと言いましょか、風評の対象

であるご本人夫妻は風評は気にされることはありませんでした。なぜなら、「その内容」を知ることがなかったからです。私が「その内容」を知らされたのは半年ぐらい経ってからで、あまりの内容であったので片山 克さんにお会いすることを避けました。お会いすると、その内容を伝えなければならなかったのです。

2017年12月29日に電話をして「その内容」を伝えざるを得ない事情があり再会したのが翌年1月でした。その間10年以上の空白はありましたが、別件では数回東京でお会いしておりました。それからのご夫妻のお苦しみにも私も耐えきれない気持ちになり、どのようにして「その内容」を否定するかお互いに話し合いました。信頼できる方々にも相談する等私は東奔西走しました。その結果、二人で〈ある約束〉をしました。それを果たすために私はあることを始めました。片山 克さんも思案しつつ〈あること〉を始めました。しかし、目的を遂げる前に2021年8月8日がやってきました。その風評は葬儀にも少なからず影響しましたが、私はそれらを一蹴して「全国朴の会」をまとめました。奥様は葬儀の後も1年間にわたり欺瞞の風評に悩まされ続けました。しかし、この一周忌を迎えるにあたり全国の多くの方々の理解あるご支援を得られて心の整理と共に膨大な資料の整理をされました。



私も片山 克さんから頂いた全ての資料を整理し、片山 克さんと約束した一部がパソコンに残っているだけになりました。その残った一部を何回かに分けて個人誌「ベストピア」の特集号として掲載することにしました。今月号はその第1回です。原資料は殆ど片山 克さん発行の「詩国の朴」からの引用です。

「念ずれば花ひらく」カレンダー物語

カレンダーは片山 克さんと鍵山秀三郎氏との絆から始まり、10年間続いた。カレンダーは鍵山秀三郎さんの存在なくして始まることはなかったと言っても過言ではない。鍵山さんを真民さんに紹介されてのは片山さんである。お二人の出会いからはじめなければならない。

1, 片山 克さんと鍵山秀三郎氏との初対面

1984年昭和59年片山さん50歳福山支店長から本部TQC事務局長へ、転任の折に福山ガス社長の松本卓臣さんから真民さんの存在を教えられ、猛読を始め、同時にTQC準備のために毎月東京への研修に参加していた。その研修に株式会社ローヤルの社員さんも同席し友

人関係となった。その友人に真民詩を熱く語り始めた。片山さんは5月には念願叶って真民さんを訪れ自分はTQCの推進に真民さんから「七字の詩」の活用を許可してもらったとその熱弁は勢いを増した。(株)ロイヤルの人たちもこの心が動き鍵山社長に報告したのであろう。当時鍵山秀三郎社長は相田みつをさんの詩に傾倒されておられた。

TQCが軌道に乗った1986年昭和61年52歳で高松支店長となって県外支店に赴任し支店運営に権限が出たところで、真民さんへの恩返しで県外にもその詩を広めようとロビー店を企画し1987年9月1日から10月16日の間ロビー展を開催した。

そのロビー店に鍵山さんは徳島県香川県のイエローハットの店主さん40数名を連れ立って10月6日に伊予銀行高松支店を訪れた。これが片山さんと鍵山さんの最初の出会いであった。

2、鍵山秀三郎氏と真民さんの対面

1990年2月片山さんの紹介で鍵山さんは初めてタンポポ堂を訪問し真民さんと出会った。以下に「詩国の朴」第27号（1990年2月発行）より引用



(1)ローヤルの鍵山社長たんぽぽ堂訪問——同席対面五百生
朝の掃除で有名な鍵山社長が坂村真民さんを訪ねられました。ぜひお目に掛かりたいとの熱意に打たれお伴し、「主」と「客」の呼吸が10年来の知己のようにピッタリと合う場面を見ました。真民さんには事前に鍵山社長についてお話を若干しておきました。それだけで同席対面五百生の書を用意して待っていてくださった。真民さんの人をもてなす奥義を教えられました。

(2)イエローハットグループの入会

「鍵山社長が率いておられる自動車部品専門店イエローハットグループの社長48名が私が主催する「詩国朴の会」へ入会されました。素晴らしい仲間を心から歓迎します。」このようにして中核のできた「詩国朴の会」は会員1100名に発展していく。

(3)この年「朴の会全国大会」を開催することになっていた。

①それを聞きつけられた鍵山秀三郎氏は四国では入手しがたい朴の苗木を10本送って準備から激励支援をしてくださったのである（同年3月）

②8月には朴庵例会にイエローハットグループの社長60名が参加され、真民さんと近い存在となった。

③1991年4月真民さんが仏教伝道文化賞を受賞されたおりの祝詞を鍵山秀三郎氏が述べられてた。

3、鍵山秀三郎氏の貢献

(1)1992年5月第3回「朴の会全国大会」
岐阜県白川町で開催されたおり、主宰者を支援、真民さんを厚くもてなし送迎のみならず博石館を案内する等の労をとってくださった。真民さんとの絆が深まった。同年9月には東京(株)ローヤル本社前に「念ずれば花ひらく」第222番碑が建立され、岐阜県博石館には「二度とない人生だから」全文の碑が建立され、碑の建立の大きなうねりを起こすこととなった。



朴庵例会においても真民さんが「凡事徹底」の解説をされた。

(2)1993年鍵山秀三郎氏が第2作目の映画

「心のふるさと」を制作、その主題歌には「真民詩・「二度とない人生だから」が選曲された。この年は岐阜県において碑の建立の波が最高潮となり、東海電子工業(株)には高さ11m重さ41tの巨大な「念ずればはなひらく」を始め、一挙に30数基の碑が有志によって建立され岐阜県が愛媛県についで第2位となった。鍵山さんの影響力の大きさには誰もが驚嘆した。

その後も鍵山秀三郎氏は全国のイエローハットの会で講演される中で多くの真民詩を読み紹介され、又、雑誌等の対談でも、真民詩の普及に地下水のようなお働きを続けられた。その活躍を片山 克さんは大切に記録に留めています

「詩国の朴」1994年12月1日発行第85号

(3)鍵山社長東奔西走の世直し

① NHKテレビに出演～掃除の聖者ローヤル鍵山社長がついにNHKの人気番組「人生これから」に担ぎ出され便所掃除を披露されました。

②第3回掃除に学ぶ会～岐阜の21世紀クラブ主催日本大正村における交流会には全国から450名が集いました。鍵山社長の実技指導があり、掃除した便所は55カ所に及んだそうです。

③真民さんの鍵山社長評～掃除を社員に強要せず、長らく1人でやられたことがすごい。人は大にしてよいと思う事は他人に押し付けがちだがそれをしなかったことが鍵山さんの本物たる所以でしょう。立派です

④名著・凡事徹底

平凡を非凡に勤める～鍵山社長の新刊が出ました。控えめな語り口で筋金いりのわかりやすい文章 第2版には

⑤小さく生きて大きく残す～これが鍵山社長の人生哲学の根幹をなす生き方です。内村鑑三は人間が残すべき遺産とは「勇気ある高尚な生涯だ」と言われたそうですが鍵山社長は世の中に小さく生きる自分の生き方、自分の商売と言う遺産を残したいと言われました

⑥ロイヤリティーを取らない～フランチャイズ方式のカー用品イエローハットはロイヤリティーを取らないことで有名です。それでいてこの不況下でも史上最高の売り上げを上げておられます。（引用終わり）

これらの文章から片山さんと鍵山さんの信頼関係の深さが読み取れます。

鍵山さんは片山さんが真民さんに関わる諸問題がある度に相談にのり、経済的な支援も惜しみなくしてくださっています。

(4)1995年平成7年5月25日、ローヤル西日本物流センターに第370番碑

「二度とない人生だから」全文の碑の入魂除幕式に真民さんが出席され、入魂された。同年8月鍵山さんが「良樹細根」という感動の経営を著された。その紹介文の後に片山さんは「坂村真民カレンダー」（鈴木出版）の大好評と紹介されている。このころから片山さんの脳裏には一般向けの真民カレンダーの発想が芽生えていたようである。密かに鍵山氏に相談していたかも知れない。

4、突然の「念ずれば花ひらく」カレンダー予告

そして1年後1996年9月1日「詩国の朴」第106号に突然、次のようなお知らせが掲載される。

(1)初のカレンダーが誕生

「ローヤル・株式会社イエローハットの来年のカレンダーは真民さんの直筆13枚と各詩と全文を載せた「念ずればはなひらく」カレンダーになる予定で、目下調整中です」

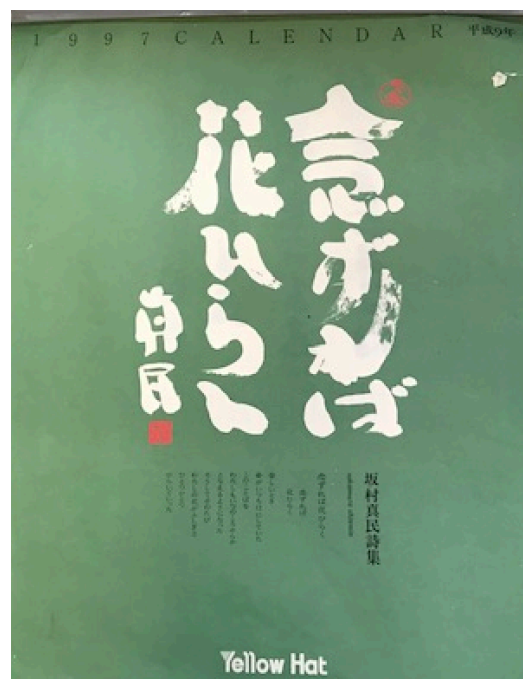
この年の11月には東京新宿の紀伊國屋新ホール（サザンシアター）が完成しその記念講演会が坂村真民さんによって執り行われ、翌朝にはイスラエルからアイザック・アイアロン氏が表敬訪問されるという真民さんにとってはとても嬉しい時期であった。人気絶頂であったかも知れない。絶頂を極めると次に待っているのは厳しい冬であることを知っておられた鍵山秀三郎さんはそれをくい止めるために、考えられたのが真民カレンダーである。

(株)ローヤルでは毎年、相田みつおさんのカレンダーを作成し、全国のチェーン店を通じてお得意さんに配布していた。売り物ではないゆえに一般の人が手に入れる事はできなかった。片山さんとの会談で予定の半数を真民カレンダーに変更してもよいが、真民先生はどう判断されるか？これが話し合われたのは8月半ばである。

交渉は専ら片山さんの仕事である。売名行為に利用されるのを忌避しておられるだけに説明はいつものように厳しかった。カレンダーに会社名が入っていることは真民詩を利用した売名行為になるとして説得は容易ではなかった。

(2)ロゴ問題

税務の世界では会社名を入れないカレンダーは交際費となり、全額課税の対象となり、会社名を入れると広告宣伝費となり、全額損金となることが常識であったが真民さんに通じる世界ではない。しかし、これからの真民詩の更なる浸透には見逃せないチャンスであることを知っておられた片山さんもいつものように粘り強い。片山さんの強みは、自分の利益を考える必要がなかったこと。ひたすら真民詩を広め深耕することであった。片山さんの脳裏には森 信三先生の「序文」が常に浮かび真民さんの生存中にノーベル賞でも取って貰いたいとの意気込みがあり、この態度には一徹頑固な真民さんも、耳をかたむけなければならなかった。よく話を聞いた上で、「分かった」と納得され、カレンダーに必要な13枚の文字を書くことを承諾された。10月片山さんはパリに出張せねばならない職務があり、詩の選定に取りかかることが出来なかったが、先ず、鍵山さんの意向が第一と考え、パリからその旨を伝えて、帰国間もなく選定に入り12詩を選んだ。お二人の選定であることは誰がみても納得のいくものであった。（別表参照）一度方向が決まるとまっしぐらになる点では真民さんと片山さんには共通しており、全速力でカレンダーの制作が進んだ。喜んだのは読者。待望の声が片山夫妻の「恐怖の作業」になることは誰も想像することはできなかった。



(3)世話人と価格設定

誰が読者に届けるか？販売価格はいくりにするか？何部発注するか？誰がリスクを負うか？問題は山積みである。

世話人は片山さんをおいて他は考えられず申し込み受付から、納品と発送、代金の回収と清算の全ては片山 克さん夫妻となった。

販売は「全国朴の会」と各地の「朴の会」の会員に限定販売として、1200円と決めた。

（市場価格は2000円を下らないB3変形版）印刷費として凸版出版に支払う費用であった。会員からの注文は予想通り順調で出版社の損益分岐点は超えてようで、途中から鍵山さんの好意でロゴ無しでの注文も可能になった。

すると販路が拡大され会員以外の受注があり、1500円として、発送費用に当てる費用の捻出をした。この時既に片山家にはある災難が押し寄せていたのである。印刷費と用紙代を差し引いた残額は指定された口座へ振り込み清算をした。片山さん夫妻の矜持は真民詩をひたすらに広めることであり、金銭を目当てにすることは一切なかった。金銭の流れを全て監視したのは、筆者小原である。当時税理士として真民さんと真美子さんに仕えることになるとき躊躇し、鍵山秀三郎氏に相談し厳しく次のようにアドバイスを受けた。

①売名行為になるとは一切してはならない

②真民さんを困らせるようなことは厳禁、透明で計算を間違っってはいけない。

③業者を厳しく管理することであった。

私は片山さんの働きをみて、その一助になればと考えてお受けすることになった。断れない事情も発生していたのである。

5、カレンダーの受発注の流れ。片山夫妻の貢献

(1)申し込み書の作成と配布

始めは会員限定で出発したので申込用紙は「全国朴の会」のメンバー1200名と各地の「朴の会」のメンバー及び田舞徳太郎氏の経営になる日本創造教育研究所の会員に配布された。各支部は申し込み者をまとめて片山 克さんに送付し現物は片山さん発送、支払いも片山さんが管理するカレンダー専用郵便口座とし、各支部は申し込みをまとめる役割のみを担った。

(2)納品業務

納品は一箱に25本のカレンダーが入っている。その箱で玄関が一杯となり、台所に通じる廊下にまで山積みになる。初めての受け入れに場所の広さは分からなかった。あまり高く積まれては次の作業ができない。限度を運送してくれる人に伝える。

(3)発送準備作業

一箱でも重い、足下に置き直して、それをカッターナイフで開き、あらかじめ用意していた包装用紙に一本ずつ円筒形にくるむ。B3変形版は縦46cm,横36.5cm、重さ250 gであり、日常では慣れない大きさ、取り扱いにくい形状である。

昼間は絢子夫人が一人で丸める孤独な作業である。黙々と続ける。2時間を過ぎると部屋が暗くなってきたことにやっと気づく。これ以上積むとその渦高さは夫人の身長を超える。蜂の巣のような筒の穴が夫人を睨む。夕方になり、もうこれ以上積むと次の包装作業が出来ないくらいになったとき、近所の方が年末の回覧板をもって来られて、驚いて「いつ

から、こんな内職を始めたのか」と尋ねる。説明する間も夫人の手は止まらない。いつ終わるかも分からない恐怖心が少し出てき始めた。

内職でないことを、近所の方に説明するのは容易ではなかった。「誰がそんなことを、ただで引き受けるものか」と些か冷ややかな目で見られたが、何とか説明をして、「明日もするのか。あれば近所の方に声をかけて助けてあげる」という親切な言葉がかかった。手伝って貰いたいのは山々であったが作業場が狭くて人の居り場がない。断り切れない、そんなジレンマを感じながら、明日の作業を少しお願いすることになった。

翌日は包装を近所の方に依頼し、夫人は名簿を見て送る準備に入った。複数本のものは更に包装を加えて、住所書きをして用意しておいた段ボール箱に入れる。二つの段ボール箱しか置くことは出来ない。この時点で持てるだけ多く風呂敷に包みそれを抱えて近くの郵便局に足を運んだ。その途中でも近所の人から前と同じ質問を受けた。「一日に何度も足を運ぶこの人は何ものぞ」と驚いたのは郵便局であった。

特に最初の年はイエローハットのロゴを入れてあるもの、ないものの2種類があり、単価も違う。その選別にも手数が加わったことは言うまでもない。請求の間違いをしてはならない。そんな神経を使いながら蜂の巣の山を根気よくくずしてゆく。闇夜の手探りのように、自分のすぐ前しか見ない。先を見ると焦る、うんざりすることが分かっている。ともかく手の届くところをしっかりと見つめ受注票との照合と宛名書き。

近所の方が驚いたのは絢子夫人がこの終わりの見えない作業をする間、笑顔が絶えることがなかったことである。夫人は「一度たりとも辛いとか、嫌だとか、面倒だとか思ったことは唯の一度も無かった。真民詩を一人でも多くの人に読んでもらいたい一心で、又、このカレンダーの一本を待って下さって、これを手にして喜んでくださる方の姿を想像すると一時間でも速く届けてあげたい気持ちだけであった」「昼間、一人で作業しているときは、真民さんや奥様と車の中での楽しい会話を思い出したりして、鼻息もあったかもしれません」と語る。夫唱婦随で真民さんに仕える喜びを感謝していた。

(4)郵送料は立替である

カレンダーの発注者は送られてきたカレンダーの中に入っている代金と送料の明細によって、郵便振込で代金を支払うことになっている。従って郵送料は片山さんの立替である。これに気づいた人はいなかった。筆者もそれを知ったのは10数年後であった。

(5)代金の回収

真民詩を愛する人は皆、誠実な人「朴友」であると信じて、代金は後払いとしたのは、片山 克さんの判断である。私はこれには反対であったが、「人を疑っては真民詩の名に恥じる」と片山さんから叱責されて後に引いた。しかし、一つ困ったことが起きた。それは真民詩の古い読者に顕著であった。古い読者は「真民さんは金を取る人ではない」「送られてくるものは、みな、ただ」という感覚が染みこんでいた。カレンダーも例外ではなく、包装紙は開けるがカレンダーしか取り出さない人が少なからずいた。一人でもそんな人がいると1500円から2000円の損害なる。そんなことは夢にも思わず入金チェックを夫婦二人で深夜までかけてすることが年末年始の仕事（正確には奉仕）となった。2月になっても代金が入らない方には督促状をだすことになったが、督促されて怒る人もおり、対応に苦慮された。

(6)代金の精算

第1回の平成9年分は片山さんの見込みが当たり完売にこぎ着けた。印刷用紙代と印刷費は凸版出版に支払うことになっている。読者からの未払いは送料を含め片山さんの負担として清算した。2年目は相当の在庫を抱えたが、その分も読者未払い分も何故か片山さんがかぶりった。（8年間で片山さんが被った損失は約130万円となったと判明した。）

この持ち出し額には梱包材の紙代は含まれていない。この常識を越えた奉仕は地元の人に「片山はカレンダーで儲けている」と誤解され、酷い場合には中傷の的にされた。筆者が監査したときは常に完売とした清算書が提出されていた。在庫を指摘すると必ず売れると話され関係者に損害を出させることはしなかった。そのことで家計が圧迫されていたことを筆者が知ったのは20年後であった。

1997年平成9年片山 克さんは63歳、
伊豫銀行の退職は1988年その後伊予銀DCカードの社長に就任されこの先駆的事業を立ち上げ、1994年60歳で退職、その後はニッシンに乞われて取締役監査役を歴任された。
1997年はニッシンでの幹部研修でヨーロッパに視察したい頃である。

6、カレンダーに関する「詩国の朴」の記録抜粋

(1)第1年目 1996年平成8年9月号第106号から

ローヤル・イエローハットの来年のカレンダーは真民さんの直筆13枚と各詩の全文を載せた「念ずれば花ひらく」カレンダーになる予定で目下調整中です。

これが初めての告知で内情は書かれていない。次号に経過説明が次のように書かれている

第107号には上記が決定したことに加え、鍵山秀三郎社長さんのご好意により、希望者には「Yellow Hat」のロゴを消して実費でお分けできることになりそうです。

第108号には「念ずれば花ひらく」のカレンダーが完成したこと。ロゴなしで限定販売でできることになり、取り扱いは「全国朴の会」と「ぱるす出版」の2カ所のみです。

第109号

①会員制販売分（割引価格1200円恐らくロゴ入り）は売り切れました

②ロゴなしのカレンダーは「ぱるす出版」へ早めに申し込んでください。@1500円+送料

(2)第2年目 1997年平成9年の案内

第119号ローヤル・イエローハットの「念ずれば花ひらく」のカレンダー平成10年版の詩が決まりましたとして12詩の紹介がある。舞台裏の交渉は書かれていないが鍵山さんと片山さんの間で昨年の反省をされ綿密な打ち合わせと真民さんの了解には触れていない。

淡々と準備が進んでいることしか読者には分からないような配慮がなされている。

第120号最終校正に入ったこと。昨年同様鍵山さんのご好意で一部ロゴを外して販売します。定価は@1500円、25本以上注文の場合は送料サービス（凸版出版直送）今回は皆さんの要望により、真民さんの写真と紹介文を最終ページに掲載しました。真民さんを知っている人にも知らない人にも分かりやすく書いてあり、プレゼントそして最適です。

第121号、到着は12月10日前後～紹介文の校正などで作業が遅れ、ご注文頂いた方にお届け出来るのは12月10日前後、遅く申し込まれた方には20日頃になります。カレンダーの発売元はアルゴンですが、発送その他は「全国朴の会」が代行します。

この文面からでも片山さんの人柄が分かる。作業の遅れに理由はない。真民さんの了解なくしては一步も前進させない慎重さが現れている。又、「いつ来るか、いつ来るか」と気をもむ読者にも協力を呼びかける姿勢が窺える。そしてこの年も代行を勤める覚悟を表明している。多くの読者は「全国朴の会」と聞くと職員が大勢いるように錯覚するが、実を言えば代行するのは素人二人、即ちご本人と奥様である当時このことを知る者は地元以外にはいなかった。

詩があり、真民さんの直筆の書があり、片山 克さんの解説がある三拍子そろった「念ずれば花ひらく」カレンダーはカレンダーの域を超え出来映えであると評価された。紹介文は真民さん深く理解された片山さんの簡潔明瞭な文体で、真民さんを説明するときにコピーして活用できる内容となっている。紹介文は下記の通りである。

12ヶ月のカレンダーの後に真民さんの直筆「念ずれば花ひらく」を再掲してその下に以下のような簡潔明瞭にして、真民さんの全容をくまなく伝える後世に残る名文がある。

7、真民さんの小伝記が最終面に載る。文章は片山 克氏

”人はどう生きるべきか”を一生の命題とする

祈りの詩人

分かりやすく深く掘り下げられた詩は、幼稚園児から財界人まで、年齢、職業を問わず幅広く愛唱され、その生き方と合わせて「人生の師」と仰ぐ人が多い。

1909年（明治42年）1月6日熊本県生まれ今年90を迎える本名昂（たかし）

8歳の時小学校の校長をしていた父の急逝によりどん底の生活に落ちる。5人兄弟の長男として母親を助け、幾多の困難に立ち向かい、甘えを許さない一徹さを身につける。昭和6年神宮皇学館（現皇学館大学）を卒業、25歳朝鮮にて教職につき、36歳の時終戦。昭和21年から愛媛県において高校の国語教師を勤め、65歳で退職。以後詩作に専念する。自分を作り上げるため、若くして短歌を志し、28歳の時「与謝野寛評伝」を著す。四国移住後、40歳で詩に転じ、個人詩誌ペルソナを発刊。昭和37年月刊詩誌「詩国」を創刊以来1回も休むことなく36年を経過した今も1200部の無償配布を続けている。

また詩の愛好者たちによって建てられる「念ずれば花ひらく」等の真民詩碑は日本全域43都道府県に分布。その数は海外の22碑と合わせて現在450基を超える。

真民詩の愛読者の中には各界の有名人も多いが船井幸雄氏は坂村真民さんを日本を代表する「徳の人25人の1人」として取り上げ、次のように評価している

「彼の作品の最大のポイントは命ある者への惜しみない愛と感謝、そして優しい激励であると言える。だから現代の社会に疲れた人たちは、救いと共に希望を見出し愛唱するのである」

また斉藤茂太氏は真民さんの詩や随筆を引用しながら「プラス思考がその人を強くする」と言う本を書き上げこのように言っている。

「真民さんの姿や文章には人を包み込むような暖かさがある。それは真民さん自身が本物なのだ」「どん底を見てきた人は人間に対する眼差しに慈愛が満ちるのだろうか」さらに斉藤氏は真民さんが挫折と劣等感をバネに詩を作ってきたことに共感し心から敬意を表している。

真民さんは大宇宙の大和楽を念願し90歳の今も毎日午前0時に起床、未明混沌の霊気の中で打座し念仏し、称名し、詩作する。午前3時30分には、月の光、星星の光を吸引し重信橋を渡って大地に額をつけ地球の平安と人類の幸福を祈願している。

1974年愛媛新聞賞（文化部門）1980年正力松太郎賞、1989年愛媛県教育文化賞、1991年仏教伝道文化賞の各賞受賞。

主な著書は詩集「自薦坂村真民詩集」「坂村真民全集全6巻」随筆集「念ずれば花ひらく」、詩画集「自分の花を咲かせよう」韓国語対訳詩集「二度とない人生だから」英文対訳詩集「鳥は飛ばねばならぬ」ドイツ語対訳詩集「たんぽぽ」など多数。

この解説文は以後3年間2001年（平成13年）カレンダー迄一部を改訂して継続された。

8, 「念ずれば花ひらく」カレンダーの物語「詩国の朴」から引用

(1)「詩国の朴」第122号1998年1月号

①カレンダーの発送終わる。最初の年であった。

おかげさまでカレンダー4000数百部の発送を終え、一段落しました。

ご注文いただいた方には大変お待たせしましたが、素人が分不相応の仕事を引き受け、その物量の多さに崩されそうになりながら2人だけの全力投球の毎日でした。

②イエローハットのロゴ入り

このカレンダーは販売目的でなく、イエローハットのご好意により昨年から作り始めたものです。シリーズで出すため「念ずれば花ひらく」以外は詩の重複を避け、特に鍵山社長が希望されるものの他は当方（片山 克）が真民先生の了解を得て決定します。（一万篇以上の中から選びます）

③真民ファンの待望

このカレンダーは真民ファンまた待望をしています。鍵山社長がその点に配慮され会社のロゴマークを外した限定版を作ってくださいました。今年は4000部の目標を立て、皆様のご協力で完売はできましたが発送体制に問題がありました。

④段取り九分見え一分

真民さんの「詩国」にしても皆さんの目に触れ見える部分はほんの一部で、詩の選定、印刷、校正、宛名書き発送等段取り九分は隠れて見えません。カレンダーの作業を通じて真民さんの偉大さの再認識でした。

⑤見えないものを見る目を持つ

真民さんはいつもこう呼びかけておられます。私たちが学ぶべきは目に見えない下座行を徹底されるお姿です。本1冊1冊への扉が開き、詩国や詩集、ビデオの発送、世界の平和と人類の幸福を祈願する行の数々。詩に隠れている見えないものを読み取り感謝しましょう。

⑥新しい郵便番号

2月から郵便番号が7桁になります。郵便物を出すものにとっては大変な変更です。新しい番号をお知らせください。よろしくご協力のほどお願いします。

(2)カレンダー2年目

2年続けての受注から発送作業の困難さを訴えられ、学んだことを伝達する正直なメッセージである。ありのままのように見えるが読者のみならず関係者に不利になるメッセー

ジは控えておられる。この年の発注は5000部であり、清算もそのようにさればす出版他、支払うべき所にはご自分の退職金から持ち出して、誰にも迷惑をかけてはいない。この一徹な馬鹿がつく誠実さは片山夫妻の生来のものと同時に真民詩へ愛、朴の花言葉「誠実な友情」（真民詩）への絶対の信頼に応えるものであった。損と得とあらば、損の道を行く」このお二人の奉仕は地元の人の一部には誤解され、片山さんは、真民さんを売名行為から守ると言いながら自分ではカレンダーや本を売って儲けているとささやかれており、その間違った噂は真民さんの耳にも伝わっていた。（8年間カレンダーのお世話をし、在庫損失は約130万円である）

余談 よく似た話

このように歌壇、俳壇のお世話を無償で奉仕をする人は日本各地に存在していた。真民さんが最初に師と仰いだ短歌の師匠岡野直七朗が1925年（大正14年）11年間仕えた尾上紫舟の「水甕」を他の弟子達の誤解と謀略に嫌気がさして辞し、自ら「蒼穹」という歌壇を創設したときの嫉妬による誤解が片山さんの上にあることを真民さんは知っていた。この事件を知っていた真民さんは片山さんに声をかけられた。

真民さん片山夫人を慰労する

「あんた達夫婦が、吹聴されていることは知っている。しかし、私はそんなことを信じてはおらん。あんたがたを心から信頼して感謝しているから、世間のことは気にするに及ばない」「ところで、奥さん、ようやってくれたね。有難いことです。何か所望することがあれば言って欲しい」

絢子夫人は「それでは、畏れ多いことですが、一字書いて頂きたい文字があります」

「ほう、それは何かね」

「私の母の名を『みち』といいますので『道』とお願いします」

「そうかね。一字でいいのかね」「はい、一字でお願いします」

「ほう、他の者は沢山の文字を言うがね。あんたは、めずらしいことを言う」

「母の名前ですから」

真民さんは母には並ならぬ思いがある。しかし、一字は書いたことがない。真民さんにはすこぶる難題であったようだ。

書いて下さったのは次のような書であった。真民さんは万を越える文字を書いてきたがこの字は絢子夫人のところにしか存在しない独特の文字である。写真お願いする。真民さんは夫人の見えない苦労を伺い知ってこれだけでは気が済まなかったようである。自分が大切にしていた記念の硯石を桐の箱に入れて、「これで、あんたの俳句を書きなはれ」とプレゼントした。（詳細はベストピア第414号に掲載）

(3)カレンダー3年目

①1998年平成10年11月1日号「詩国の朴」第132号と第133号で告知されている
平成11年「念ずれば花ひらく」カレンダー表紙は朴の葉の色としたこと。
12月上旬には届けられること。200部以上の注文にはその会社のしたロゴを入れることが
出来ること。

この年から株式会社イエローハットから独立して単独で発行することになった。単に世話
人であるにも関わらず、見えない九分の仕事を敢えて引き受けられたのである。

②1999年平成11年1月1日号「詩国の朴」第134号

お知らせで1行の控えめな告知

「念ずれば花ひらく」のカレンダーが少し残っています。

(この控えめな言葉が何を意味するのか誰も理解できなかった。)

こうした配慮に私たちは気づくべきであったと筆者は今、思う。

(4)カレンダー4年目

1999年10月1日号「詩国の朴」第143号及び第144号

①2000年版の告知

カレンダーの表紙に「鳩寿一」のサインが入る。これは真民さんが91歳という意味である
こと。21世紀の最初2001年は「鳩寿二」の予定です。ずっと続いて欲しいと思っていま
す。詩国が第500号を迎えるのは「鳩寿五真民」の2月となります。

「真民さんの新しい延命の願いが、世尊と同じ80歳までの願いが一気に95歳に伸びたこ
と。使命感と感謝が長寿の秘薬ではないでしょうか」

第145号

今年は部数を圧縮しましたので売り切れになる可能性があります。その場合は先着順でご
容赦下さい。

②第146号2001年1月号

2000年の「念ずれば花ひらく」のカレンダーは日本創造教育研究所をはじめ、多くの皆さ
んのご協力により完売となりました。昨年は沢山残っただけに、感激一入です。ありがと
うございました。

③目指せ「詩国」第500号

カレンダーの発送は依然として絢子夫人の奉仕で、近所の有志が応援に参加された。その
苦労の中で、片山夫妻が何を願われたかが文面から読み取れる。「目指せ500号」真民さ
んの延命の願いを叶えさせたのは、紛れもなく片山夫妻の目に見えない助けであった。
助けはカレンダーだけではない。朴庵例会の送迎、全国各地へのお伴、各地から真民さん
を訪問する人の送迎等すべて自費であったことを知る人は多くはない。対価を求めず専ら
真民さんに仕えてた人である。このような姿を理解した人は片山さんを「この世の売名行

為から真民さんを守った人」との評価がなされている。片山夫妻の奉仕作業によって商売が出来なかった人、出来なくなった人からは疎まれる存在であり復讐の対象とさえなってしまった。

(5)カレンダー 5 年目

①2000年11月号「詩国の朴」第156号

2001年「念ずれば花ひらく」カレンダー21世紀へのメッセージ

- a.同封のパンフレットの通り21世紀初のカレンダーをつくりました。このカレンダーは5年目となりますが市販は一切せず希望者への直接頒布のみです。
- b.真民詩12篇の代表作は第4回までに採用された詩との重複はありません。
- c.鳩寿二真民」表紙「念ずれば花ひらく」の詩だけは変わりませんが、書は新しく書かれたもので鳩寿二真民とサインしていただきました
- d.この年から最後のページの解説が変わりました。「人はどう生きるべきか」から「地球の平安と人類の幸福を祈る」に変わりました。その全文を下記に記します。

②2000年12月1日発行四国の方第157号

a.21世紀初の「念ずれば花ひらく」カレンダー1本1200円+送料

12月上旬から発送。10本以上で早めにお申し込み東京の出版社から直送しますので12月の上旬に到着します。お申し込みの遅れた方及び小口の方へは順次発送いたします。

b.表紙は宇宙色

真民さんは21世紀は宇宙の時代と言われます。21世紀スタートのカレンダーの表紙は詩集「宇宙のまごなし」表紙と同じ渋い紫色としました。そして1枚めくった1月の詩は「地球づくり」です。

③2001年1月1日発行「詩国の朴」第158号

a.2001年「念ずれば花ひらく」カレンダーお買い上げに感謝

21世紀のスタートを飾る「念ずれば花ひらく」カレンダーをお買い上げいただき誠にありがとうございました。発送が12月上旬から中旬に集中したため若干お待たせした人もありましたが12月20日には大半の発送を終えました。皆様のご協力に心から感謝いたします。地元の企業ジョー・コーポレーション社が会社のカレンダーとして採用、大口の購入者となった。

b.残部多少あり

このカレンダーは一切市販せずほとんどを「朴の会」が取り扱っています。理想としては完売することですが昨年品切れで皆様のご要望に応えられない状態になったことから今年は多めに作り多少の残部が出ています。まだお持ちでない方があればお世話下さい。

④私見

5年目のオリジナルと表現しているのは、前年までの4年間48篇の代表詩を選んだが今年も重複はない。これで60篇の代表詩が選ばれたことになる。真にカレンダーの域を脱した一冊の本のようになる、しかも、真民直筆の書と全詩と改まった解説のある貴重な作品となったことを意味している。

購読者に絶大なる感謝の意を表しているところに注目せねばならない。昨年の品切れの失礼をカバーするために増刷したが完売はしなかった。1月になって「まだお持ちでない方お世話ください」と訴えている。実はこの一行は片山さんの呻きである。またしても奥さんの家計のやりくりに負担をかけることになるからである。

12月20日現在ではまだ大半が発送出来ていないことへのお詫びも行間から読み取れる。毎年繰り返されてきた作業の複雑さ、見えない九分の段取りについては、一言の苦情も言い訳もない。

この年は片山さんが特に傾注した「愛蔵版坂村真民詩集」4冊セットが出来上がりその販売にも力を入れられた。更に4年間の代表詩を日めくりカレンダーにして販売したので、心なき人々の「片山の儲け」に嫉妬が増した。

しかし、10本以上の方に出版社から直送する。9本以下は片山から発送するという面倒なことを受けておられる。清算書には片山さんへの入金は見当たらない。一円の代価は「今までの恵みを台無しにする」と言われ、頑固一徹一銭の報酬を求めておられない。凡人には理解しにくい面もあったといえよう。賢明なる読者諸氏に訴えたい。片山さんが信じられない額の金銭を真民詩を広めるために持ち出したことは事実である。ごまかしはない。くすねるなどもつてのほかである。

(6)カレンダー 6年目

①2001年11月号詩国の朴」第168号

最下段のお知らせに一行

「念ずれば花ひらく」カレンダーは数に限りがあり市販はいたしません。ご注文はお早めに。

②2001年12月号詩国の朴」第169号

カレンダーは12月初旬から発送開始

待望の2002年「念ずれば花ひらく」カレンダー、今回はカレンダー上部の金具をやめ、環境に優しい糊付けの仕上げとなっています。また、ミシン目も少し強くして、月替わりの処理をしやすくしました。完売の場合は先着順でご容赦ください。

今年からは今までの詩と重複しても構わないから、代表詩をとの要望で書を書いて貰った。真民さんは書は今年で最後と言われた。

③2002年1月号詩国の朴」第170号

「念ずれば花ひらく」カレンダーが代表大好評

a.完売・増刷

「今年のカレンダーはよくできている」と真民さんご自身に褒めていただいた2001年カレンダーは大好評で追加注文が相次ぎ完売となりました。急遽の増刷で一部お届けが遅れたことをお許しください。

b.大好評の理由は真民詩の代表作「念ずれば花ひらく」、「二度とない人生だから」、「めぐりあいの不思議」に新しく採用した詩「何を持つか」「地球は人間だけのものではない」などのバランスが良いからからです。

c.日本人に希望と勇気を与えるカレンダー

失われた10年と言われるほど政治経済が混迷を続ける日本。すべてに自信を失った日本人にこのカレンダーは限りない希望と勇気を与えます。残部が多少あります。

この年も結局在庫を抱えてしまった。はじめの完売で打ち切れない人の良さあらわれている。TQCの顧客志向が消えない片山 克さんに多くの読者が甘えてしまうことが当たり前となってしまった。この点で真民さんははっきりしている。もうカレンダーの書は書かないと断言し実行されたのである。

(7)カレンダー7年目。あつてはならなかったことがあった。

①2002年平成14年10月号第179号と180号

a.「念ずれば花ひらく」カレンダー平成15年版は真民さんの強い意志により発行しません。平成9年版から6年間のご愛用に心から感謝申し上げます。

b.ご要望に応じて日めくりカレンダーを再発行することになりました。定価1000円、原則として「朴庵例会」での販売です。

②2002年平成14年12月号第181号

これで絢子夫人もゆつくりと新年を迎えられるとホッと一息ついたのもつかの間

大口の企業からこれまで6年間の総集版を発行して欲しいとの要望が強く2003年版を作成しました。

大口の企業とは松山の地元の会社で、これまでも助けて貰ったとの片山さんの恩義の気持ちから要望に添うように真民さんと交渉、書は書かぬとの前言は変わらず、今までの書から、片山さんが編集する許可をもらい発行に踏み切った。大口企業の要望に応じておればそれで済むものを、待望する読者の顔が浮かび、どうせつくるならと間口を拡げてしまった。始めは「朴庵例会」で発売した。これなら絢子夫人の手間も省ける。その後が糸を引く

次のような告知をした

9本以下の方は東京のぱるす出版へ申し込むこと。

10本以上の方は「全国朴の会」片山 克に申し込むこと。

これは印刷会社が松山の会社が変わったからという理由と加齢のため、発送作業が出来なくなった絢子夫人の労力を少なくするためであった。

③2003年1月1日号「詩国の朴」第182号

a.隠れたベストセラー「念ずれば花ひらく」カレンダー完売

平成9年から発行してきたカレンダーの中から良いものを13点を厳選して作った2003年総集版の「念ずれば花ひらく」カレンダーは完売となりました。世の中には数多くのカレンダーがありますが、これほど値打ちのあるカレンダーは珍しいと評価され隠れたベストセラーとなりました。

b.日めくりカレンダーは在庫あり。同時に制作した日めくりカレンダーはまだ在庫があります。これは真民詩の代表の32編からなるもので、上記のカレンダーのほとんど入っています。また真民さんの写真入りのプロフィールも日めくりの最終ページについています。

しかし、このカレンダーの引き受け、印刷会社の変更は後に片山 克さんの命を脅かす種となってしまった。

地元の印刷会社は初めてのことで原価計算が膨らむ。販売数は昨年までには及ばない。結果、諸費用を支払って残る現金は以前から比較して少額となった。筆者はこの清算書をチェックした。間違いはなかった。しかし、誤解された。誤解することが都合がよかったのであろうか。大いなる陰謀が表面化するが、ご本人にはそのことは全く分からず時は残酷に過ぎた。

(8)カレンダー8年目

①2003年10月1日号「詩国の朴」第191号

a.2004年版「念ずれば花ひらく」カレンダー「鳩寿五」は又しても大口注文先から「昨年同様に総集版をお願いしたい」との要望が強く、表紙の「鳩寿五真民」を新たにして作成することにしました。

b.スタイル一心の保存版～内容は過去に使った約70篇の中から選んだ「念ずれば花ひらく」

と12篇の詩です。スタイルを一新して真民さんの書が一層浮き出るものとします。詩国第500号記念の保存版となるカレンダーです。この年の2月に記念祝賀会が予定されていた。

c.注文上のお願い価格は昨年同様1部1000円の予定で、一本二本の小口発送はパルス出版にお願いしています。目下12月上旬にお届けできるよう印刷会社と調整中です。

カレンダーの発送は商売でやるわけではないのでどうかその点をご承知おきください。

片山さんの遠い耳にも噂は伝わってきたようである。しかし、片山夫妻は真民さんの言葉を疑うことなく最後まで信頼し嘘の伝聞を気にとめなかったが、最後の一文は付け加えられた。遅きに失した感である。

②2003年12月1日号「詩国の朴」第193号

平成16年版「念ずれば花ひらく」カレンダー発売、@1000円、大口の注文は12月1日納品、その他のお申し込みも順次発送し、上旬には納品できるようにします。

まだ、お申し込みでない方はお急ぎください。残部は先着順でお送りします。

もはや付け加える言葉がない。熱心に敬意を表するのみ。前年と同様の種に肥料をやることになった。

(9)カレンダーの最後の記事

①2004年平成16年11月詩国の朴第204号

お知らせ～「念ずれば花ひらく」のカレンダーは昨年で発行をとりやめ、今年の販売はありません。鈴木出版、ジョー・コーポレーション社などが発行する坂村真民詩カレンダーはありますが、取り扱いはできません。あしからず。

この記事によって終わったかに見える記事に、ジョー・コーポレーション社の名がある。同社社長は熱心な真民ファンであり、片山 克さんの後輩でもある。2001年から「念ずれば花ひらく」カレンダーの大口受注者となり、同社の会社のカレンダーとして採用、その後も毎年カレンダーの大口購入者として、当時隆盛を極めていた数少ない企業の一つで、2004年8月15日の愛媛新聞に「愛媛に生まれてよかった。真民さんの詩に出会えたから」といって真民詩「二度とない人生だから」の全文を全紙を使って紹介広告を出され四国の人々を驚かせました。それほど熱心なファンの願いを聞き捨てにできず、この年も、詩の選定、真民さんの了解取り付けに奔走された。この年の表紙は「すべては光る」であり、毎月のカレンダーには詩に相応しい写真が選定され、その上に真民詩が印刷されている。社名はしっかりと印刷され販売目的でないことが税務署にも分かる。更に翌年2006年同社は再び「念ずれば花ひらく」を表紙として写真入りで12の真民詩を選定されカレンダーを発行された。

9、筆者のひとりごと

このような紆余曲折を経ながら1997年（平成9年）から発行された真民カレンダーは10年間作成され、多くの人々に真民詩の素晴らしさを伝え続けた。その結果は真民碑は世界5大州、日本全県に737基が建立された。しかし、欺瞞に満ちた風評はじわじわと全国に浸透していった。

2005年夏の終わりに私は真美子さんから「父が話がしたがっているから、お越し頂きたい」と電話を受けた。当時真民さんが入院生活をされておられることは知っていたので、私はその日時と時間に合わせて羽田空港を出発した。いつもなら片山 克さんが出迎えて

くれるはずであったが、その日は始めてタクシーに乗りその運賃高さに驚いた。そして、午後3時、決められた時間きっちりに病室にお邪魔した。

真民さんはベッドに坐して私を待っていてくれた。そばに真美子さんがおられいつものようにかいがいしく看病されていた。私には用件もなかったので長居はしなかった。数分の雑談の後、聞きたくない話を聞いてしまった。私は一瞬、「そんなことはない」と心の中で叫んだ。しかし、病床にある96歳の真民さんと論議をする気はおこらなかった。

「私だけが聞き置けばいいこと」だと思い、帰り際に真美子さんが部屋からでられて私をエレベーターに見送って下さったおりに「そんなことは絶対にありません。悪い噂にすぎませんから、よく言っておいてください」とお願いした。しかし真美子さんは「父が言っておりますので」と返答された。私はこの時から平成28年12月27日まで片山 克さんと私的な会話をすることはなかった。仲違いした訳ではない。会うのが辛かったからである。一度だけ、東京で仕事の話で来られ会計事務所にお連れしたことはある。

このような経緯があつて「やっと、終わった」と叫び、私は真民さんの世界から逃げ出した。だから、まだ一度も真民記念館には足を運んでいない。

この1年間御協力をしてくださった多くの方々に御礼を申し上げます。本来ならお名前を掲げるべきだと考えますが、諸般の事情で差し控えます。

片山絢子様も念願叶った整理ができて安堵したと仰っております。

一周忌はご家族だけで静かに過ごされました。ご冥福を祈ります。